江戸時代の花たち ⑨

書物に見る江戸時代の園芸文化

小笠原 亮

「四季花くらべ　秋」3枚続き錦絵。歌川豊国作（亀戸豊国または3代豊国）。嘉永年中の作

「四季花くらべ 秋」

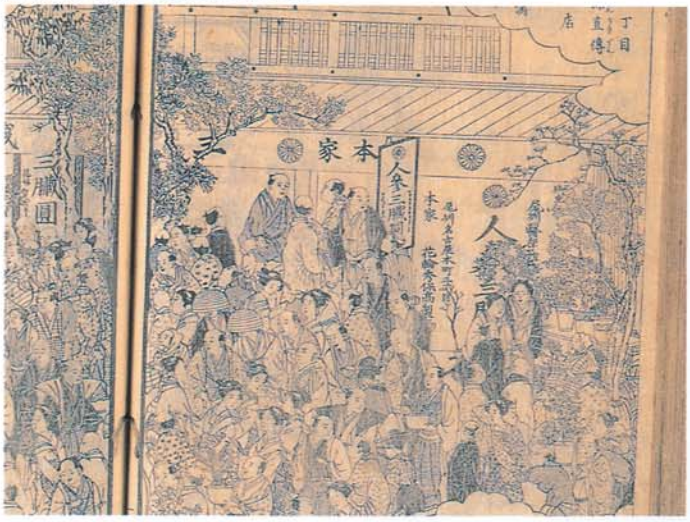
雑花園文庫蔵

「四季花競」は春夏秋冬の四部作。時代は嘉永ごろ、場所は江戸市中。浅草か神田あたりで縁日の露店の夜店の情景である。土に挿した棒の先の太めの蠟燭が明々と回りを照らしだす。向かって右の振り袖姿の娘さんに花をねだられたのであろうか。中心の父親が紙入れを出し、今にも買ってあげたき風情。左の母親はよせばいいのにの態。描かれているドラマはさておき、背景の夜店の植木が気になるところ。並べられている鉢植えは、ソテツ、オモト、ヒトツバシダ、マツバラン、サボテン、ツタ、セキショウ、カヤツリグサなど。シオン、ハギ、オミナエシ、シュウカイドウ、フヨウ、キキョウ、キク、ニチニチソウ、ススキ、フジバカマなどの根巻ものに加えてシバも長方形に切り取られて縄で結ばれて並ぶのは現在も同様であり、ほほえましい。

こうして露店とはいえ、店に並べられた販売のほかに、天挿棒で荷って売り歩く振り売りも盛んに行われ、「苗売り」などは初夏の風物詩ともなった。一方、巣鴨や染井の里は江戸近郊地で園芸生産地帯であり、産地直売も行われた。

こうした販売は、全国いたるところで行われたようすが各地の名所図絵やその他の資料によって知ることができるし、生産と販売とは案外分業化されていて、露天商、行商などそれぞれ地域性や個人的条件で多角的な流通形態が発達していたようである。

「尾張名所圖繪　前編」7冊（第1冊）。岡田・野口撰、小田切春江画。天保15年刊。尾張名古屋本町3丁目、雑踏のなかの植木露店商。群衆のなかにも買い求めて帰る姿がある



1 写真提供／小笠原亮